

受難の主日（枝の主日）

2021.3.28

マルコ 15・1-39

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高神父

今日のお式の初めに、枝を手に手に持ってイエス様のエルサレム入城を記念しました。エルサレムはダビデの町、そこに神様の神殿がある聖なる町です。そこに向かってイエス様が入城されたということは、イエス様がこれから起こることの意味を前もってわたしたちに示すためでもあります。ダビデの子孫である主イエス・キリスト様をご自分の町に入られ、神様の神殿に入っていわれます。そのイエス様の意図は、こうしてご自分がエルサレムに入城されることは、ダビデの子孫として、ダビデに約束されていた神様の救いの御業が実現する、そして、その神様の御旨は人々に迎えられて「ホサンナ」の叫びの中にエルサレムに入城されたイエス様がどのような意味でダビデの末であるのか、どのような意味でメシアであるのかということが、イエス様の入城の姿の中に示されています。

人々に捨てられ、エルサレムの町のはずれに十字架につけられることによって、神様が御子イエス様に託された使命が全うされます。ご自分の命をわたしたちすべての者のために、イエス様の十字架のもとでイエス様をののしった人々も含めてすべての人々の罪をあがなうために、イエス様はエルサレムに向かって歩みを進められました。

そのようなイエス様の十字架の後に従うわたしたちも、イエス様と同じように、わたしたち自身の罪のため、そして人々の罪によって苦しむ人々のために、イエス様の後に従って、イエス様と共に、この世のすべての神様に背いたわたしたちの罪の償いとして、あがないとして、これからの日々を生きて行くことができることを願って、そのことを誓って、今日のこの主の受難の主日のミサをお捧げいたしましょう。